

Mission 飼育下での繁殖技術を確立する！

動物園では、野生で絶滅が心配される動物を保護收容し、飼育条件下で繁殖させる技術開発も行われています。最近、がぜん注目されているのは、なんといっても中部の高山帯を代表するニホンライチョウ (*Lagopus muta japonica*) です。国の特別天然記念物に指定されて保護されていますが、山岳域へのニホンジカやキツネの進出、温暖化の影響などにより個体数が減少、このままでは絶滅してしまうのではと心配されています。目下の取組状況を聞いてみました。

■長野市茶臼山動物園と飯田市立動物園

この二つの園では、将来のニホンライチョウ飼育に向け、ヨーロッパ原産亜種のスバルバルライチョウ (*Lagopus muta hyperborea*) の飼育をはじめています。茶臼山では2010年に上野動物園から譲り受けた成鳥2羽から、飯田では今年1月にいしかわ動物園から来た成

鳥2羽から飼育をスタート。この近縁亜種は狩猟鳥として立体ケージを使った飼育繁殖技術がすでに確立されているとのこと



長野市茶臼山動物園のゲージで飼育されるスバルバルライチョウ

ですが、茶臼山・飯田ともに、ケージ飼育を基本にしながらも、広めの禽舎を利用した平飼いを取り入れ、高い繁殖成績を残しているとのこと。茶臼山では、通常ペアで7～8個の産卵数のところ、その倍近い有精卵採取に成功した事例もあるそうです。これらの技術や経験をニホンライチョウへ反映させてゆくことが期待されます。



飯田市立動物園に新設されたライチョウ舎

※飯田市では8月9日に雌1羽が事故（頸部損傷）により死亡。再発防止を徹底して引き続き飼育繁殖に取り組むとのことです。

■大町山岳博物館

大町山博ではニホンライチョウの研究と飼育に昭和30年代から長い年月をかけて取り組んできました。飼育については2004年でいったん途切れていましたが、2015年にライチョウ舎をリニューアルして、ついに今年からニホンライチョウの飼育を再開しました。これは環境省の生息域外保護増殖事業として、今年6月に乗鞍高原の野生個体群から採取した12卵を、上野動物園、富山ファミリーパークと並んで、4卵を受け入れたものです。これら4個体は順調にふ化・発育中。DNA検査の結果、雌雄2羽ずつと判明し、今後の飼育下での繁殖に期待が高まっています。



大町に持ち込まれたニホンライチョウの卵
(写真は6月24日撮影、大町山博提供)



大町山博ですくすく育つニホンライチョウの雛
(写真は7月11日撮影、大町山博提供)